

「シクラメン」

草野皓一

花さきを空へ並べるシクラメン坂はなかほど降りくる風に

春くればきつと飛ばそう竹とんぼびよんと傾げゆくさきは海

蒼穹に恰も架かる虹のごと調べに我ら風と成りたり

さゆる夜の篝火花の一群れにほんのひととき漫ろ笑むひと

「息子」

酌み交わし恋の話しに傾ける君の笑顔は時に幼く

覚えてる殴られた日の痛さまで笑ふ息子と拳みくらべ

小器用なをのこがひとり門を出づ飲みかけの珈琲流しに残し

ふるさとへ向かうのだろうあの列車きよほほほのほが裏返る